

## 論文概要

特別支援学校で行う開発教育の指導方法と生徒の反応の分析  
～フィリピンと日本の特別支援学級での国際交流を事例として～

13MD0128 星野 百合子

### 1. 研究の目的と方法

#### 研究の目的

特別支援学校では、開発教育・国際理解教育の実践が難しいとされ、現場での授業実践は稀である。また、授業での実践を試み開発教育を学ぶ教諭の数も少ない。その背景は三つ考えられる。

一つ目は、開発教育・国際理解教育の特徴でもある参加型の授業実践が難しいと受け取られていることである。二つ目は、特別支援学校における開発教育の指導方法や教材の活用方法が開発されておらず、指導では各教諭の工夫が必要となることである。三つ目は、特別支援教育の中では、身辺自立・社会自立・職業自立が大きな目標となっているため、開発教育の必要性が感じられにくい現状があるからである。

上記三つの理由から、これまで特別支援学校で開発教育を行う教諭が少ない状況であった。そこで、本論文では、これまで明らかにされてこなかった特別支援教育での開発教育の実態を示し、考察を加えることと、特別支援教育における開発教育の新たな授業案を開発し、実践して成果を確認することを目的とする。

また、日本とフィリピンの特別支援学級が国際交流を行い、その指導内容とそれによる生徒や周りの教師の変化を記録し、分析する。この分析により明らかになったことが、現場での開発教育の実践に活かされ、今後、特別支援教育の中で開発教育の視点を取り入れた指導の機会が増えることを期待する。

#### 研究の方法

本論文は、特別支援学校での開発教育の指導方法と、生徒の反応を研究し、開発教育の要素を取り入れた指導の有効性を解明することを課題とする。

研究方法としては、研究課題の背景への理解を深め、既存研究・資料の整理・分析によって開発教育とは何かを追求する。JICA 国内事務所に依頼して、過去 5 年間に教師海外研修に参加し、開発教育の実践を特別支援教育の中で行った授業実践を集めた。それを記録し、指導の方法と生徒の反応をまとめた。また、日本とフィリピンの特別支援学級の国際交流をはかり、交流校の教師にヒヤリング及び個別事例への調査を行った。国際交流では、特別支援教育に適した工夫を加えた教材を開発し、実践と改善を繰り返して生徒の様子を記録するとともに、指導に必要なとってくるキーワードが生まれてきた場合は、それをまとめた。

## 2. 論文の構成

第1章では、特別支援学校で行われている教育と開発教育の関係について整理した。特別支援学校や特別支援学級で開発教育が行われる機会が少ない原因を提示し、今後、現場での教育が活発になることで、社会にもたらされる変化と可能性について述べた。また、実践における課題についても明らかにした。

第2章では、開発教育のねらいとその特徴についてまとめ、「特別支援教育」で実践することの意義はどこにあるのか、現場で実践されている開発教育の現状と課題を提起した。

第3章では、まず、国際協力機構 JICA が毎年実践している教師海外研修の資料をもとに、特別支援学校で行われた開発教育の実践を考察した。第1節では教師海外研修とは何かを明らかにし第2節で全国の特別支援学校で過去に行われた事例を抽出し、まとめた。第3節では高等学校、中学校、小学校で行われた、開発教育の事例を提示し、特別支援学校での実践と比較研究した。通常学級での実践と照らし合わせることで、特別支援学校における独自の指導方法や、教材の活用方法を発見するとともに、指導の共通点と相違点を見つけ出し、まとめた。第4節では、特別支援教育での事例から明らかになった開発教育の手法や教材について述べた。第5節では、実践報告書から明らかになった開発教育の成果や課題を明らかにした。

第4章では、筆者が青年海外協力隊員として派遣されているフィリピンの教育制度と教育体制について述べた。また、フィリピンの法律から分かる障がい者理念を明らかにし、制度としての特別支援教育と、実際に目で見た特別支援学級の現状について述べた。これは、第5章の国際交流を学習材料の一つとして取り上げた開発教育の実践例を述べるための基礎情報である。海外で草の根的に行われている開発教育を伝えることも目的とする。

第5章では、はじめに第1節で、筆者が青年海外協力隊員として勤めているマアシン小学校について述べ、第2節でマアシン小学校の特別支援学級で行った開発教育の事例を提示した。第3節で日本の特別支援学校とフィリピンの特別支援学級の国際交流授業の実践事例を提示した。第4節で日本の特別支援学校とフィリピンの特別支援学級で行った国際交流の授業の様子について述べた。授業の中での生徒やフィリピンの教師の様子から、国際交流の授業がもたらした生徒・教師・学校全体への影響を分析した。

第6章では日本の特別支援教育の中で過去に行われた開発教育の実践や、フィリピンで行った開発教育の授業実践、また日本とフィリピンの国際交流の授業にかんする取り組み全体における振り返りをした。そして、障がい分野における開発教育の影響と課題を記した。最後に結論を述べ、今後の課題と展望についてふれた。

### 3. 論文の概要

障がい分野において、開発教育をしている機会は少ない。それは、障がいのある生徒が、開発教育の中で、友達と意見を共有しながら思考の幅を広げるのが難しいと受けとられてしまうことが原因である。特別支援教育の中では、身辺自立・社会自立・職業自立が大きな目標となっているため、授業者が開発教育の必要性を感じにくく、実践方法や教材の開発がされにくい。事例が少ないことが、教師にとって、生徒が開発教育授業の内容をどこまで理解できるか、予測がつかないという不安要素になっている。また、一度実践した教師にとっても、周りの教師の理解が得られにくいいため、一人ひとりの生徒に合わせた開発教育の教材を工夫して作ることが難しく、継続には手間と根気がいる。しかし、近年、JICAの開発教育研修・教師海外研修や各 NPO・NGO 団体が主催する開発教育の研修に参加した特別支援学級の教員を中心に障がい分野における開発教育の可能性が見直されている。

本研究では上記の課題と向き合い、障がい分野における開発教育の可能性を明らかにするために、特別支援学校で行った開発教育の指導方法を書き出し、授業時や授業後の生徒の反応を分析した。

はじめに、第 2 章で開発教育、国際理解教育、グローバル教育や人権教育など、開発教育に似類する教育の目的や起源について調べることで開発教育のもつ可能性を明らかにした。そして、それが福祉分野でどのように活かすことができるか検討した。

開発教育では、「多様性の尊重」を学ぶ。特別支援教育を受ける生徒の中には、一人ひとりが違った“障がい”と呼ばれる特徴を持っていることを“欠点”と悲観的にとらえている生徒もいる。開発教育を学ぶ中で、社会の中で生みだされた環境的・心理的な壁に気づき、それを越えて一人ひとりが人間として尊重されるべき社会を自分たちで作り出す動機が芽生える。また、学びを通して「地球規模の諸課題に自ら参加できる能力」を養う。世界の一員として諸課題に主体的に取り組む経験は、自分が社会の中で役に立てるということに改めて気付く要因になり、結果的に自己肯定感が高まる。障がいのある人の多くは、社会の中で“受け手側”の立場に置かれることが多い。特別支援教育の中でも知識や技術を受け取る学習スタイルが一般的である。自ら疑問を持ったことに対して考え、企画し、行動する自発性を育てることは、生徒が卒業後に社会の中で、支援を受け取るだけでなく、発信する側、提供する側として活動できる力を養うことができる。そういった意味で、特別支援教育の中で開発教育に取り組むことは、生徒にとっても社会にとっても効果的であるということが分かった。

次に第 3 章で、過去に日本の教師が特別支援教育の中で実践した開発教育の授業案を集め、教育手法と教材の工夫について分析した。特別支援教育では、開発教育の基本的な参加型教育手法に加えて、個々の生徒の特徴に合わせた教材の工夫がされていることが分かった。その中でも多く見られるのが、教師が外国人役となり生徒の前で演じたり、飛行機の搭乗体験をしたりする、シミュレーションを用いた手法である。教師が工夫を凝らし飛行機の室内模型を作ったり、民族衣装を着て外国語を覚えて生徒に話しかけたりする努力は、生徒に生の経験をさせることを目的としており、生徒が目を見つめてそれに取り組む様子が報告されている。教師自身がユーモアを持ち、自分の経験を生徒に追体験させ、生徒がそれを感じ取ろうとする健気な眼差しから、一人ひとりの生徒に潜在している能力を引き出すことができると分かった。

第 2 章、第 3 章で明らかになった障がい分野における開発授業の課題点を基に、第 5 章

では、日本とフィリピンの学校で国際交流授業を行った。交流は、私が JICA ボランティアとして赴任したフィリピンのマアシン小学校の特別支援学級と、日本の特別支援学校や中等学校と行った。まず交流を行う前に、私が、マアシン小学校の特別支援学級で、貧富の差や環境問題、人権を巡る諸課題を開発授業の中で取り上げた授業を行い、生徒の反応やフィリピンの教師の反応を分析した。その結果、開発を巡る問題を参加型の授業形態で学ぶことで、生徒の活躍の場が増え、一人ひとりがもつ能力・可能性を認め合えるようになることが分かった。そこで、他国を知り文化や環境の多様性に気付くことで、「違い」を肯定的に受け止められるようになることと、開発をめぐる問題を話し合うことで生徒の視野を広げ、それを克服するための活動に参加することで、生徒が自ら社会に進出する動機をもつことを目標に日本の特別支援学級の教師と共に交流授業の計画をした。各国の食文化の交流ではお好み焼きやバナナキューなどのレシピを紹介しあうことで、他国の新しい文化に触れると共に、自国の文化の良さに改めて気付く機会となることが分かった。環境教育の交流ではゴミ拾い活動を始め、周りの人に呼びかけた。支援の受け手という印象を崩し、社会を開発する発信者として積極的に活躍し同じ地球上に住む仲間として公平に学び合うことで「支援する側」「支援される側」という概念を問い直すことができた。

障がいのある生徒が開発について考え話し合う授業を展開するのは難しい。しかし、授業のテンポを遅くしたり、同じ内容を繰り返し行ったりすることで生徒の理解が深まった。生徒の特徴に配慮した教材を準備することも教育手法のひとつといえる。このような少しの配慮で、開発教育の目的の一つである、生徒が授業後に新たな視点を持ち、今までに無い新たな世界に見開かされるという経験が、障がいの有無に関わらず、特別支援教育の中でも同じように実現できると分かった。

障がい分野において開発教育を行うには、生徒に現状を構造的に理解させることが重要である。それには、話し合いのみでなく、経験を通して現状に触れる機会が重要である。だからこそ、開発教育に取り組む人が互いに繋がり合い、実践を重ね、生徒と共に成長し、その成長を周囲に伝えて行く必要があることが明らかになった。